

『『経済学批判要綱』への序説』

における労働の二重性把握

—その限界と到達点—

明 石 博 行

はじめに

『『経済学批判要綱』への序説』(以下『序説』)におけるマルクスは、いまだ労働の二重性を意識的に区別していなかった。マルクスが「経済学の理解にとっての跳躍点」(KI, MEW. Bd. 23, S. 56)を発見し、「古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的最終成果」(Kr, MEW. Bd. 13, S. 37)に到達する直前の著作、それが『序説』であった。それゆえ、『序説』は、経済学説史上画期的意義をもつ著作ではあるが、理論認識の根底に決定的な限界を有しており、経済学者として成熟したマルクスの著作とみなすことはできない。以上

の仮説の論証を、私は本稿において試みたいと思う。

一 A・スミスの富および労働

一般の把握の若干の特徴

『序説』段階のマルクスがいまだ労働の二重性を意識的に区別していなかったことは、『序説』におけるスミスの労働一般把握に関する評価——『序説』のスミス評価——のうちにこれを看取することができるのであるが、この『序説』のスミス評価の内容を正確に理解するためには、スミスの富および労働一般把握の理論構造に関する知識が必要とされる。そこでまず、その理論構造の特徴を必要となるかぎりで概観しておかなければなら

ない。

富 (wealth or riches) の把握の検討からはじめよう。この点で注目すべきことは二つある。一つは、スミスの体系が素材的富すなわち使用価値を端緒¹⁾に出発点としており、彼は富をなによりもまず使用価値ととらえたという²⁾ことであり、いま一つは、素材的富と商品としての富との概念的区別を彼は明確化できず、素材的富が(交換)価値をもつことを当然視して、事実上商品をしばしば分析の対象としたということである。マルサスが指摘したように、「アダム・スミスは、どこでも富についての整然とした正式の定義を与えていない」(6)、p. 88上、四八頁)。また、彼の富概念はけっして一義的ではない。そのため、彼の富の把握は明瞭さを欠いており、その不明瞭さは種々の批判や富の定義をめぐる論争を呼び起こした³⁾。だが、その批判や論争に立ち入る必要はここではない。ここでは上記の二点について若干のことを述べるだけで充分である。

スミスは、「諸国民の富は、貨幣という消費不可能な富に存するのではなく、その社会の労働によって年々再生産される消費可能な財貨に存ずる」としたことにおい

て、……この体系の教義はあらゆる点において正当であり、また寛大であり、自由でもある」(2)、vol. II, p. 16 (三)、四八六—四八七頁)と重農主義者の把握を評価し、自らの体系の冒頭で「その国民が年々消費するいっさいの生活必需品と便益品」(ibid., vol. I, p. 1, (一)、八九頁)という富観を示した。このばあいの富は、マルクスのいうように「素材的富すなわち諸使用価値」(K. S. 主)である。またスミスは、しばしば富を「土地および労働の年々の生産物」と規定した。マルサスはこの規定に依拠して富を物質的対象 (material object) に限定したのであるが、この規定においても富はなによりもまず使用価値ととらえられているのである。

ところが、スミスの分析対象は、特殊なばあいをのぞけば商品経済とりわけ資本主義的商品経済であり、素材的富が(交換)価値をもつことを彼は当然視している。そのため彼は、しばしば富を使用価値と(交換)価値の統一物としての富、すなわち事実上商品ととらえているのである。「資本が増減するごとに、……生産的な人手も自然に増減する傾向があるが、その結果、その国の土地および労働の年々の生産物の交換価値、その国のすべ

ての住民の実質的富 (real wealth) および収入も自然に増減する傾向がある」(*ibid.*, vol. I, p. 320, (二) 三五〇頁)。「これらの手段(輸入を制限し輸出を奨励する諸手段——引用者)が、この年々の生産物の価値を増加させるか減少させるかいずれの傾向をもつかに応じて、それらは明白にその国の実質的富および収入を増加させるか減少させるかいずれかの傾向をもつに相違ない」(*ibid.*, p. 417, (三) 四九頁)。等々。このようにスミスは、使用価値にすぎぬ素材的富と商品としての富との概念的区別を明確化することなく、多くの箇所です実上商品分析の対象としたのである。

つぎに、スミスの労働一般把握について検討しよう。

ここでふまえるべき点は、以下の四点である。第一、使用価値とともに、使用価値形成労働一般あるいは分業としての使用価値形成労働一般を端緒としてスミスの体系は構築されるが、スミスはそのさい使用価値形成労働を概念的に正しく把握していない。第二、労働の二重性が意識的に区別されておらず、同じ労働一般が使用価値に関連してみられるか(交換)価値に関連してみられるかによって、そこに事実上の労働の二重性の区

別が現われるにとどまる。第三、資本・賃労働関係が前提されるかぎり、価値を形成する生産的労働は利潤すなわち剰余価値を形成する生産的労働でもあるが、生産的労働の把握において彼はしばしば重農主義に復帰している。第四、彼にあっては、資本・賃労働関係を前提するかぎり、使用価値形成労働一般、価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般とが不可分に結びついている。

第一に、スミスはまず、「労働一般が、しかもその社会的総姿態での分業としての労働一般が、素材的富すなわち諸使用価値の唯一の源泉であると宣言した」(KII, S. 44)のであり、彼の体系は(分業としての)使用価値形成労働一般から出発する。「あらゆる国民の年々の労働は、その国民が年々消費するいっさいの生活必需品と便益品を本源的に供給する資源であり、この生活必需品と便益品は、つねにその労働の直接の生産物か、またはその生産物で他の国民から購買されたもののかのいずれかである」(2, vol. I, p. 1, (一) 八九頁)。「諸国民の富」の「序論」はこの有名な一句からはじまるが、ここでスミスは、「一面的にたんなる有用労働の立場にたつて」(KII, MEW, Bd. 24, S. 377)のであり、

「生活必需品と便益品」という使用価値を形成する労働について論じている。そしてこの労働は、特殊な労働ではなく一般的な労働である。つまり、この労働は使用価値形成労働一般だといえる。また彼は、『諸国民の富』の冒頭章において、「労働の生産諸力における最大の改善と、労働をあらゆる方面にふりむけたり充用したりするばあいの熟練・技巧および判断の大部分とは、分業の効果によるものである」〔2〕、vol. I, p. 5. (一、九八頁)ととらえ、分業について考察している。ここで「労働の生産諸力」というばあいの労働は、分業によって細分化された使用価値形成労働である。しかし、この労働はまた、分業によって細分化された労働の総体としての労働一般としてとらえられている。だから、『諸国民の富』第一章で論じられている労働は、分業としての使用価値形成労働一般であるといえる。

このようにスミスの体系は、(分業としての)使用価値形成労働一般を端緒に出发点とするのであるが、そのさいの彼の把握は二つの限界をもっている。一つは、使用価値形成労働は特殊な具体的活動として使用価値を形成するのだということを概念的に把握しえなかったこと

である。もちろん彼は、労働の特殊性・具体性を表象としては知っている。だが、労働の特殊性・具体性を表象として知ることと、それを使用価値形成労働の特殊性・具体性として概念的に把握することとは、まったく別のことである。そして、『諸国民の富』には、使用価値形成労働の特殊性・具体性について明示的に論じた箇所は存在しないのである。いま一つは、使用価値形成労働は自然的素材と結びついて使用価値を形成すること、また使用価値の形成には労働手段や労働対象が必要なこととを忘れてしまったことである。むしろ、こうしたことを彼はつねに忘れていくわけではない。彼は富を「土地および労働の生産物」と規定しているし、資本としての労働手段や労働対象にも論及している。しかし、『諸国民の富』の冒頭の一句にみられるように、「彼は自然的要素をまったく見過ごした」(KIL, S. 374)。しかも、「そのさい彼は、このようなことは何年も前から伝えられた労働手段や労働対象の助けがなければ不可能だったことを忘れていく」(KIL, S. 377)のである。

第二に、スミスは労働の二重性を事実上区別したとはいえ、その二重性を意識的には区別しえなかった。古典

派経済学は、労働の二重性を「事実上区別している」(KI, S. 94) が、「明文と明瞭な意識性をもっては区別していない」(ibid.)。A・スミスは、価値を形成する労働の支出であるかぎりでの労働と、使用価値を形成するすなわち有用で合目的な形態で支出されるかぎりでの労働とを混同してゐる」(KII, S. 383) のであり、彼は「労働の二重性を区別していない」(ibid., S. 377) のである。

スミスにあっては、使用価値形成労働一般と価値形成労働一般とは同じ労働一般である。第一に、彼の使用価値形成労働は、価値形成労働と同様特殊性・具体性を欠いたたんなる(分業としての)労働一般である。第二に、彼は、価値形成労働の同質性・同等性を「労苦や煩勞」(2) vol. I, p. 32, (一) 一五二頁)・自分の安楽・自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならぬ」(ibid., p. 35, 同、一五六頁)という点でとらえているが、この点は(分業としての)使用価値形成労働一般の属性でもある。「あらゆる物がそれを獲得しようとする人に現実に費やさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞である」(ibid., p. 32, 同、

一五一頁)。みられるように、この「労苦や煩勞」は物を獲得する使用価値形成労働一般の属性なのであり、この属性が同時に価値形成労働一般の属性なのである。第三に、『諸国民の富』には、明瞭な意識性と明文をもって労働の二重性を区別した箇所は存在しない。したがって、彼の労働の二重性の区別はあくまでも「事実上」の区別にすぎない。スミスにあっては、同一の(分業としての)労働一般が、使用価値に関連してみられるか(交換)価値に関連してみられるかによって、そこに事実上の労働の二重性が現われるにとどまるのである。

第三に、スミスのばあい、資本・賃労働関係を前提するかぎり、価値形成労働一般は利潤を形成する剰余価値形成労働一般でもある(2)。彼は、資財が特定の人々の手に蓄積されたのちには、「賃金を前払いし、その労働の原料を提供した資財の追加量として当然利潤が支払われなければならない」(ibid., p. 51, (一) 一八九頁)と考える。だから彼は、資本・賃労働関係を前提するかぎり、価値を形成する生産的労働は利潤を形成する剰余価値形成労働たる生産的労働でもあるととらえ、生産的労働の二つの規定を無造作に並存させるのである。「労働には、

それが加えられる対象の価値を増加させる種類のものと、このような結果をまったく生まない別の種類のものとがある。前者は価値を生産するのであるから生産的労働と呼び、後者は不生産的労働と呼んでさしつかえない。たとえば、製造工の労働は、一般に、自分が加工する材料の価値に自分自身の生活維持費の価値と親方の利潤とを付加する。これに反して、召使いの労働はいかなる価値をも付加しない」(ibid. p. 313, (一) 三三七頁)。

こうしてスミスにあっては、資本・賃労働関係を前提するかぎり、価値形成労働一般と剰余価値形成労働一般とが不可分に結びついているのであるが、この点に関連してさらに、彼の把握には重農主義的偏向がみられるという点に留意する必要がある。スミスは、農業では使用人のみならず「役畜もまた生産的労働者」(ibid. p. 343, (二), 三九六頁)であり、「自然も人間と並んで労働する」(ibid. 同頁)ととらえ、つぎのようにいう。「農業に使用される資本は、製造業に使用されるどの等額の資本よりも多量の生産的労働を活動させるばかりでなく、それを使用する生産的労働の量においてもまた、その国の土地および労働の年々の生産物に、その住民の実質的富お

よび収入に、はるかに多くの価値を付加する」(ibid. p. 344, 同, 三九七頁)。そして、「地代は、人間の所産とみなしうるあらゆる物をさしひき、またはそれをつぐなってなおその後に残る自然の所産である」(ibid. 同頁)、と。みられるように、農業には特別の価値生産性があるとされ、そこから地代が説明されている。このようにスミスには、価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般の把握に関連して重農主義への復帰が認められるのである。

第四に、スミスにあっては、資本・賃労働関係を前提するかぎり、使用価値形成労働一般、価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般は不可分に結びついている。スミスは労働の二重性を区別しえなかったから、彼の使用価値形成労働一般と価値形成労働一般とは同じ労働一般であり、両者は一体の関係にある。また、資本・賃労働関係を前提するかぎり、彼の価値形成労働一般は利潤を形成する剰余価値形成労働一般であり、両者は一体の関係にある。それゆえ、スミスの体系では、資本・賃労働関係を前提するかぎり、使用価値形成労働一般、価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般が不可分に結びついて

いるのである。(1)

(1) スミスの不明瞭さにたいする批判としては、富の源泉把握の多様性に関するロータデルの批判(3)、pp. 116—119)・富の二義性に関するリカードの批判(5)、pp. 273—278, 三二五—三三〇頁)・富と価値とを混同したとするトレレンズの批判(8、p. 7)等がある。また、スミスに依拠した富の定義に関する論争としては、マルサス(6)、pp. 28—29, 四八—四九頁(7)、pp. 69—81, 五七—六五頁)とマカロック(10、pp. 5—6)との間のそれが代表的なものといえる。

(2) スミスの体系における価値形成労働一般と剰余価値形成労働一般との不可分の結びつきは、資本・賃労働関係を前提にしてのみ言いうることである。スミスは、単純商品生産者も価値を形成・維持するがゆえに生産的労働者だととらえてゐるが(2、vol. II pp. 173—174, 四八—四八三頁)、このばあいの労働は、価値形成労働ではあるが剰余価値形成労働ではない。しかし、資本・賃労働関係を前提するかぎり、内田義彦氏がいわれたように、「剰余価値の生産と生産された全剰余価値の資本家による個人的消費とが、『価値の存続』＝単純再生産のなかにふくまれている」(15、三二二頁)のであり、価値形成労働と剰余価値形成労働は不可分に結びついている。

(3) 念のため用語法について一言する。マルクスは使用価値形成労働を具体的有用労働と把握したが、スミスはその

具体性を把握できず、たんに有用労働(一般)をとらえたにとどまる。それゆえ、ここでは彼の有用労働(一般)を使用価値形成労働(一般)と規定している。また、マルクスは価値形成労働および剰余価値形成労働を抽象的人間労働と把握したが、スミスは抽象的人間労働を明確には把握できなかった。それゆえ、ここでは抽象的人間労働と厳密に区別して価値形成労働(一般)、剰余価値形成労働(一般)という規定を用いている。なお、スミスは労働の二重性を区別できなかったから、彼が富を事実上商品ととらえているばあい、商品を形成する労働(一般)という独自の範疇が成立しうる。そこで、以下ではこのような規定も用いる。

二 『序説』のスミス評価

A・スミスの労働一般把握は以上のような理論構造を有するのであるが、『序説』のマルクスは、このスミスの労働一般把握を「巨大な進歩」と評した。すなわち、『序説』においてマルクスは、重金主義および工業＝商業主義、重農主義、近代の経済学という順で労働把握の学史的総括をおこない、近代の経済学の出発点に位置する労働一般について、スミスの把握を代表例としてこれを論じ、そのさいつぎのように彼の把握を評した。「富

を生む活動のすべての現実性を捨て去ったことは、アダム・スミスの巨大な進歩であった。——工業労働でも商業労働でも農業労働でもないが、しかしそのどれでもあるたんなる労働。富を生む労働の抽象的一般性とともに、こんどはまた富として規定された対象の一般性、生産物一般、すなわち、労働一般ではあるが対象化された過去の労働としての労働一般。この移行がどれほど困難なものであったかは、アダム・スミス自身がまだときおり重農主義に復帰していることからわかるのである」(Gr. S. 24, MEGA, II-1.1, S. 39)^⑧と。

このような『序説』のスミス評価の内容を検討するならば、『序説』のマルクスがいまだ労働の二重性を意識的に区別していなかったことがわかる。それゆえ、この含蓄に富んだ一文を仔細に分析してみなくてはならない。本節および次節はこの分析を課題とするが、本節では、『序説』のスミス評価がスミスの体系の端初^⑨出発点たる労働一般に関する論評を主題とするものであることを確認したうえで、(一)、ここで論じられている「富」とは何か、(二)、ここでの「富を生む活動」たる労働一般とは何か、(三)、マルクスはここでスミスの把握のいかな

る点を「進歩」と評したのか、といった諸点を明らかにらしめることとしよう。

さて、『序説』のスミス評価がスミスの体系の端初^⑨出発点たる労働一般に関する論評を主題とするということは、つぎの点から明らかである。第一に、『序説』の第三節では、最初にいわゆる下向法と上向法との区別がなされ、ついで上向法の出発点に位置する諸範疇が検討されて論理と歴史の歩みの関係が明確化されていくのであるが、『序説』のスミス評価もそのような上向法の出発点たる諸範疇の検討の一環である。第二に、マルクスは、そこで検討されている労働一般について、「近代の経済学の出発点」(Gr. S. 25, MEGA, II-1.1, S. 39)あるいは「近代の経済学がまさきに掲げているもっとも単純な抽象」(*ibid.*, SS. 39—40)と規定しており、そこではスミスの労働一般把握が近代の経済学の労働一般把握の代表として論ぜられている。したがって、この点についてはこれ以上多言を要しないであろう。

では、『序説』のスミス評価における富とは何であろうか。マルクスはそこで、スミスの富概念を彼なりに再規定してこういっている。「富として規定された対象の

一般性、生産物一般、すなわち、労働一般ではあるが対象化された過去の労働としての労働一般。この部分をいかに解するかが問題であるが、たんなる可能性だけかといえ、およそ三通りの解釈がありえよう。

一つは、この富を使用価値と解する解釈である。この解釈には一定の根拠がある。第一に、スミスの体系の端初Ⅱ出发点が論評されているという『序説』のスミス評価の文脈からすれば、『諸国民の富』冒頭の「生活必需品と便益品」という使用価値を念頭において富という用語を用いたと考えることができる。第二に、『経済学批判』(以下『批判』)におけるマルクスは、スミスの体系の論理を要約し、「アダム・スミスは、労働一般が、しかも社会的総姿態での分業としての労働一般が素材的富つまり使用価値の唯一の源泉であると宣言した。そのさい彼は、自然的要素をまったく見過ごしたものだから、もっぱら社会的富の、交換価値の領域に追い込まれることになった」(Kt. S. 44)と述べているが、ここでは使用価値形成労働一般がスミスの端初とみなされていると解される。『批判』の規定を『序説』解釈に直接援用することは正しくないが、それを一つの傍証とすることは

許されよう。第三に、「資本は『新たな労働(生産)のための手段として役だつ(実現された)労働(本来は対象化された労働)である』といわれるばあい、それがなくては資本とはいえないようなその形態規定は度外視されて、資本のたんなる素材が考察されている」(Gr. SS. 168-169, MEGA, II-1.1, s. 179)とこう、マルクス以前の経済学の資本把握にたいする批判にみられるように、「対象化された労働」という規定が使用価値(たる資本)を意味するばあいもありうる。したがって、この富を使用価値とする解釈は成立しうるであらう。

二つには、これを事実上商品であるとする解釈が考えられる。そして、私見によれば、この富が事実上の商品である可能性は高い。というのは、第一に、当時のマルクスが彼なりにスミスを読み込んで、「生活必需品と便益品」を商品ととらえたということは充分ありうる。第二に、『序説』の冒頭では、「ここでの対象はまず物質的生産である」(*ibid.*, S. 5, *ibid.*, S. 21)とされ、それとの関連において「スミスやリカードが端初としてたてた個別的かつ個別化された獵師や漁夫は……」(*ibid.*, *ibid.*)と述べられている。スミスやリカードの獵師や漁

夫は商品生産者として現われるのであるから、この叙述は、マルクスがスミスの端初を商品としてとらえていたことを示唆するものであり、執筆時期からみて『批判』の規定より重視さるべき規定である。第三に、「これらの〔諸商品の——引用者〕諸特殊性の総体がその〔富の——引用者〕実体をなす」(*ibid.*, S. 132, *ibid.*, S. 140)とか「その〔富の——引用者〕特殊な諸実体としての諸商品」(*ibid.*, S. 134, *ibid.*, S. 147)といった規定にみられるように、諸商品(の総体)という意味で富という語を用いている例もマルクスにはしばしば見出される。だから、『序説』では商品概念が明確な形では確立されていないが、この富が事実上商品である可能性は高いのである。三つには、この富を(交換)価値と限定して理解する解釈がありうる。たとえば、「ここでの『生産物一般』とは『富一般』、すなわち普遍的な規定性をもつ交換価値を、直接には意味している」(19、五一六頁)という平田清明氏の解釈などがそれである。このように明示的に述べられている例は多くないが、この解釈は、すぐ後にみる『序説』の労働一般を価値形成労働一般と解する見解の基礎なのであり、今日の通説だといってよい。し

かし、この解釈は妥当ではあるまい。第一に、この解釈は『序説』のスミス評価ではスミスの体系の端初¹¹出発点が問題とされているということと整合しない。スミスの体系の端初たる富は使用価値であり、マルクス自身はスミスの端初を使用価値ないし事実上商品ととらえていたと解される。そうである以上、『序説』当時のマルクスがスミスの端初を(交換)価値に限定して理解していたことを明白に示す叙述が見出されないかぎり、ここでの富を(交換)価値と限定するのは無理である。そして、従来の研究においてそのような叙述が論拠として提出された例を私はみることがないし、むしろ、さきの『序説』冒頭の規定や『批判』の規定はそこでの富を(交換)価値と限定できぬことを示している。第二に、富と価値とを混同してはならぬということとは、マルクス以前から明確化されていたことであり、彼が両者を同一視していたとは考え難い。富と価値とはスミスにおいてもある程度区別されているし、リカード以降両者を混同してはならぬということは常識化していた。⁽⁵⁾このような当時の経済学界の到達点をふまえるならば、マルクスが富と(交換)価値とを一般的に同義語として用いていたとはまず

考えられない。

それゆえ、『序説』のスマイス評価における富については、つぎのように結論することができ。この富を（交換）価値と限定して理解してはならないのであって、それは使用価値あるいは事実上商品であると解される。そして、『序説』冒頭の規定などから、この富は使用価値よりむしろ商品である可能性が高いが、マルクスの叙述が断片的であるだけに、いずれが正しいかの断定は避けるべきである、と。

つぎに、『序説』のスマイス評価における「富を生む活動」たる労働一般とは何であるかを検討しよう。従来の研究では、この点について大別して二様の解釈が存在するが、いずれもこの労働一般を正しく把握していない。そこで、従来の解釈がいかなる点で一面的で誤っているかを明らかにしつつ、この労働一般とは何であるかを究明することにしよう。

従来の一つの解釈は、これを価値形成労働一般と解する解釈である。この解釈は、ただばく然と価値形成労働一般と解するにとどまる解釈と、『資本論』の価値実体あるいは抽象的人間労働と同一視する解釈とに、さらに

わけられる。過去の研究では、この労働一般を価値形成労働一般と解する解釈が圧倒的に多い。そして、たんに価値形成労働一般にとらえるにとどまらず、『資本論』の価値実体等と同一視する解釈も広く流布されている。

「捨象的な範疇の性質については、マルクスは『政治経済学批判序説』のなかで『人間的労働』を例にとって、詳細な説明をなしている。この人間的労働は、……『資本論』の冒頭における商品の分析に際し、マルクスが商品価値の実体となしているところのものである」〔14〕、

九三頁〕。「価値の分析の場合も、論理上歴史説あるいは概念の自己展開説の立場からすれば、……価値の実体としての抽象的労働は、歴史的、ブルジョア的なものとされることになる。そして、このことの一つの有力な根拠としてあげられるのが、『序説』で、マルクスが抽象的労働を近代的カテゴリーだとしていることである」

〔16〕、九八頁〕。「『序説』において——引用者〕『出发点』」最初に指定された『労働一般』とは、『交換価値』の実体たる労働である。つまり労働者の人格的特殊性・労働の具体的内容を捨象された、すなわち抽象的に人間的な労働である」〔19〕、五頁〕。等々。以上代表例として、

河上肇、見田石介、平田清明三氏の見解を引用したが、この種の引用はその他にも多々あげることが出来る。

『序説』のスマス評価における労働一般を価値形成労働一般と解する解釈は今日通説であるといつてよいが、この労働一般を『資本論』の価値実体等と同一視する見解に限定しても、それは今日の通説であるといえるのである。

しかし、この労働一般を価値形成労働一般と解する解釈は一面的である。というのは、この解釈では、『序説』では近代の経済学の「まさきに掲げている」・「出発点」たる労働一般が論じられているのであり、その代表例としてスマスの労働一般把握が論評されているのだということが、充分考慮されていないからである。マルクスによれば、スマスの体系の端初出発点は使用価値あるいは事実上の商品である。だから、この労働一般はなによりもまず使用価値形成労働一般あるいは商品を形成する労働一般であると考えられるのであり、この点を無視することは一面的であり、当を失っている。

また、この労働一般をさらに特定化して『資本論』の価値実体等と同一視する解釈についていえば、これは誤

っていると私は考える。まず、このスマス評価の対象はスマスの把握した労働一般であつて、これを『資本論』の価値実体と同一視することは許されない。スマスは労働の二重性を区別できず、価値形成労働の把握でも多くの限界をもっていた。労働一般把握におけるスマスとマルクスの相違を無視し、両者を同一視することは正しくない。つぎに、これは本論文全体で論証すべきことであるが、『序説』のマルクスはいまだ労働の二重性を意識的に区別しえていなかった。それゆえ、労働の二重性を意識的に区別しえていない段階の労働一般と、労働の二重性が明確に区別されている『資本論』の価値実体等とを同一視することは正しくない。

従来 of いま一つの解釈は、この労働一般を使用価値形成労働一般とみる解釈である。たとえば、遊部久蔵氏はこういわれている。『序説』の労働一般は、「けつして価値の実体としてのそれではなく、むしろ生産的労働の本源の規定にかかわるものである」〔18、一四七頁〕。同様の解釈は時永淑氏にもみられる。「スマスは、まず『その国民が年々消費するいっさいの生活必需品および便益品』という人間にとって有用な一般的対象的物件の潤沢

を問題とし、その本質を『工業労働でもなく商業労働でもなく農業労働でもないが同時にそのいずれでもあるような労働』……としてつかみ、こうした富の潤沢をまず分業……によってもたらされるものとした」(17、二二頁)。

しかし、この解釈も一面的であり、正しくない。まず、この解釈は『序説』の富が事実上商品である可能性を無視している。また、この解釈は、「アダム・スミス自身がまだときおり重農主義に再度復帰している」という『序説』のスミス評価の規定を正しく考慮していない。

前節でみたように、スミスの重農主義への復帰は価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般の把握に関連してみられるのであるから、価値形成労働一般も剰余価値形成労働一般もこのスミス評価では念頭におかれていると解される。たしかに、スミスのばあい、労働の二重性を區別せず、剰余も物的生産物であることが前提されているから、この規定も使用価値形成労働一般把握の問題と関連してはいるが、この規定を使用価値形成労働一般に関するものと限定することはできない。

それゆえ、『序説』のスミス評価では、スミスの労働

一般把握の総体が論評対象に含まれていると解される。より厳密に言えば、『序説』のマルクスは、スミスの価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般の把握を念頭におきながら、スミスの体系の端初たる使用価値形成労働一般あるいは商品を形成する労働一般について論評したと解されるのである。

以上の考察をふまえるならば、マルクスがスミスのいかなる点を「進歩」と評したのかは、おのずから明らかである。『序説』のマルクスは、スミスの価値形成労働一般の把握のみを「巨大な進歩」と評したのではない。彼は、スミスの価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般の把握を念頭におきながら、スミスの使用価値形成労働一般あるいは商品を形成する労働一般の把握をもって「巨大な進歩」と評したのである。本節の考察をふまえるならば、このように結論することができであろう。

(4) 錯綜してはいるが、『序説』の第三節「経済学の方法」の論理構成は、大よそ以下のように整理されうる。(一)、「第一の道」(いわゆる下向法)と「第二の道」(いわゆる上向法)との区別およびそれぞれの概要の定式化。第一・第二段落。(二)、「第二の道」における経済学的諸範疇の序列と歴史的発展過程の序列、論理の歩みと歴史の歩みとの

相違および関連についての考察。①、「第二の道」の出発点をなす単純な諸範疇の考察。(i)、単純な諸範疇もまた具体的な諸範疇より前に独立の歴史的・自然的実在をもたないか、という設問への一応の回答。第三・第四段落。(ii)、労働一般という範疇を例としての、もっとも抽象的な範疇の超歴史性と歴史性の解析。第五・第六・第七段落。②、論理と歴史の歩みに関するより一般的な考察。(i)、ブルジョア社会の編成・範疇とブルジョア社会以前の社会の編成・範疇との相違と関連に関する考察。第八段落。(ii)、ブルジョア社会の範疇の序列とブルジョア社会の歴史的発展過程の序列との相違に関する考察。第九段落。③、総括および若干の例証。第一〇・第一一・第一二・第一三段落。(iv)、篇別プランの提示。第一四段落。

(5) リカード『原理』第二〇章、マルサス『原理』第六章および『諸定義』第五章、トレンズ『富の生産に関する一論』第一章、マカロック『原理』第二部第一章等を見よ。

三 『序説』における労働の

二重性把握の限界と到達点

以上の考察をふまえ、さらに『序説』のスマス評価を分析するならば、つぎのことがわかる。(一)、『序説』のスマス評価は労働の二重性を厳密に区別する見地からす

れば、きわめて不正確である。(二)、『序説』のスマス評価には、労働の二重性を明らかに区別していなかった初期マルクスの学史総括との共通性がみられる。(三)、労働の二重性を意識的に区別しえたのちのマルクスには、『序説』のような不正確で初期マルクスとの共通性を残すような学史総括は消失している。これらのことは、『序説』段階のマルクスがまだ労働の二重性を意識的に区別していなかったことを示すものである。

第一に、『序説』のスマス評価は不正確であるという点についてであるが、これは、『序説』のマルクスがスマスの使用価値形成労働一般あるいは商品を形成する労働一般の把握を「進歩」と評したことからわかる。商品形成する労働一般のうちには使用価値形成労働一般も含まれるのであるから、いづれにしても、マルクスはここでスマスの使用価値形成労働一般の把握を「進歩」と評したことになる。だが、このような評価は労働の二重性を厳密に区別する見地からすれば正しくない。

まず、使用価値形成労働は具体的で特殊な労働であるから、これをたんに労働一般ととらえる把握は、使用価値形成労働を正しくとらえたものではない。すでにみた

ように、スミスは使用価値形成労働を労働一般ととらえ、その具体性・特殊性を概念的に把握しえなかった。この点はスミスの限界の一つであって、これを「進歩」と評することはできない。また、マルクスがのちに述べたように、「素材的富の源泉としての労働は、税関吏アダム・スミスにわかつていたのと同様に立法者モーセにもわかつていた」(Kt. S. 24)のであって、使用価値形成労働一般の表象はきわめて古くから存在する。だから、使用価値形成労働一般の把握は「進歩」でも何でもない。さらに、スミスは使用価値形成労働は自然的素材と結びついて使用価値を形成するということを彼の体系の端初において忘れている。だが、ペティにおいて「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素である」(1)、p. 68. 一一九頁)ことはとらえられており、これはむしろペティからの後退である。それゆえ、労働の二重性を厳密に区別するならば、スミスの使用価値形成労働一般の把握を「巨大な進歩」と評することは正しくない。

しかるに、『序説』のマルクスはこのような不正確な評価をおこなっている。このような不正確な評価をあえ

ておこなったということ、ここに『序説』のマルクスがいまだ労働の二重性を意識的に区別しえていなかったと判断する第一の根拠がある。

第二に、明らかに労働の二重性を区別しえていなかった『『経済学・哲学手稿』(以下『手稿』)において、『序説』と同様の学史把握は存在する。『手稿』においてマルクスは、すでにつぎのように述べているのである。

「ケネー博士の重農主義学説は、重農主義からアダム・スミスへの移行をなす」(MEGA, I. 2, S. 259, S. 385)のであり、「重農主義にはこういうことが証明されるであらう。……ある特定の労働、ある特殊な労働がではなく、労働一般が富の本質であるということがそれである」(ibid.)⁽⁷⁾と。また、「資本の文明的勝利は、まさしく死んだ事物のかわりに人間労働を富の源泉として発見し創造したことだ(ボール・ルイ・クーリエ、サン・シモン、ガニール、リカード、ミル、マカロック、デステュット・ド・トラシおよびミシエル・シュバリエをみよう)」(ibid., S. 255, S. 381)。⁽⁸⁾

顧みるに、たとえばデステュット・ド・トラシは、「われわれの肉体的および精神的能力がわれわれの唯一

の本源的富 (richesse originale) であり、それらの能力の使用、なんらかの労働がわれわれの唯一の根源的財宝 (treasure primitif) であつて、われわれが富 (biens) と呼ぶすべてのものの……はつねにこの能力の使用が生み出すのだということは確かである。だから、それらすべての富 (biens) はそれらを生み出した労働を表現するにすぎず、もしその富が一つの価値をもつならば、あるいはまた二つの価値をもつにせよ、それらはその価値をその発生源である労働の価値からひき出しうるにすぎぬということも、また確かである」(4, pp. 99—100) と述べており、リカードもこれに賛意を示した (5, pp. 284, 285, 三二八頁)。こゝで「二つの価値」といわれているのは使用価値と交換価値のことであるから、デステュットやリカードはどちらの価値も労働のみから生み出されるという不正確な規定をおこなっていることになる。⁽⁸⁾したがって、「富の源泉(本質)は労働である」という『手稿』の規定は、実は、このような当時かなり有力であった不正確な把握をほぼうけ入れていたことを示すものであり、事実上「商品の源泉(本質)は労働である」という不合理な把握を表現したものである。

たしかに、『手稿』において「特殊な労働」という範疇が明確化されている点は、古典派がこの範疇を明確に把握しえなかっただけに、注目に値する。だがこれは、使用価値形成労働の特殊性の概念的把握にまで到達したものとはいえない。『手稿』当時のマルクスは、明らかに労働の二重性を区別できず、「富(事実上商品)の源泉(本質)は労働である」という不正確な把握をもつて学史の総括をおこなっていたのである。

『序説』のスマス評価は、このような『手稿』の学史総括と共通する性格をもつ。「富を生む活動」という「富の源泉(本質)たる労働」という把握ときわめてよく似た把握をもつて重農主義からA・スマスへの進歩を総括していること、この点において『序説』のスマス評価は、労働の二重性を区別しえていなかった『手稿』の学史総括と共通する性格をもつのである。このような両者に共通する性格もまた、『序説』のマルクスがいまだ労働の二重性を意識的に区別しえていなかったという判断に一つの論拠を提供するものである。

第三に、労働の二重性を区別しえたのちの『経済学批判要綱』(以下『要綱』)や『剰余価値学説史』(以下『学

説史』)には、もはや『序説』のように初期マルクスの不正確な把握を共有したような学史総括はみられない。『序説』のスマス評価とよく似た学史総括は、『要綱』と『学説史』にも見出されるが、そこでは「富を生む活動……」といった不正確な規定は姿を消し、スマスが重農主義を越えてなしたとげた進歩は価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般の把握に関するものであることが、明確にとらえられているのである。

『要綱』のそれは、「重農主義者」という項でまとめられている叙述である。しかし、この叙述はスマスが重農主義を越えてなしたとげた進歩についてはあまり論じていないので、ここでは検討しない。ただ、ここでは「富を生む活動」の規定性を捨て去ったことをもって「進歩」と評するような把握はもはやみられず、剰余価値把握の問題が学史総括の中心論点となっていること、この点に注意を喚起しておくにとどめる。

『学説史』のそれは、編集者によって「スマスによる社会的労働のあらゆる部面における剰余価値の発見」という表題を付された箇所を中心とするものである。これは重要であるので、その主要部分を引用しておこう。

「A・スマスには、剰余価値の分析、したがってまた資本の分析において、重農学派を越えてなしとげられた大きな進歩が見出される。重農学派のばあい、剰余価値をつくりだすのは一定種類の現実的労働——農業労働——だけである。だから、彼らが考察しているのは労働の使用価値であって、価値の唯一の源泉である労働時間、一般的労働ではない。……ところがA・スマスのばあいには、価値をつくりだすのはどのような使用価値となつて現われるかはまったくどうでもよい一般的な社会的労働、たんなる必要労働量である。剰余価値は、それが利潤や地代の形態で現われようとするいは利子という第二次的形態で現われようと、この労働のうち労働の对象的諸条件の所有者が生きた労働との交換によって取得する部分にはかならない」(Mw.J, MEW.Bd. 26—I, SS. 56-57)。

一見してわかるように、「ここでは「富を生む活動」の規定性を捨て去ったことをもって「進歩」とみるような不正確な評価はまったくみられず、スマスのなしとげた「進歩」は価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般の把握に関するものであることが明確にされている。労働の二重性を厳密に区別する見地からすれば、このような

限定を付してスミスの「進歩」を論ずるのが正しいのであり、後年のマルクスはこうした限定を明確化するように変化したのである。このようなスミスの「進歩」を評価するにさいしての変化、このような変化がみられるということも、『序説』のマルクスが労働の二重性を区別しえていなかったとする判断の一つの根拠である。

以上三つの根拠から、『序説』ではいまだ労働の二重性が意識的に区別されていなかったと判断される。おそらく、『序説』当時のマルクスもまた、剰余価値把握におけるスミスの進歩を念頭において彼の労働一般把握について論じたのであろう。しかし、その評価は正確ではなかった。スミスにおいては、使用価値形成労働一般、価値形成労働一般、剰余価値形成労働一般が不可分に結びついているが、その把握の全体を「進歩」とみなし、使用価値形成労働一般の把握も「進歩」とみなす評価に陥っているからである。当時のマルクスは、労働の二重性の区別という根本問題に関するかぎり、「特殊な労働」という範疇を明確に把握していたことをのぞけば、古典派の把握を本質的には超克しえていなかったのである。⁽⁹⁾

(6) この点についてマルクスは、F・リストが労働の二重

性を区別せず、彼は「イギリスの近代の経済学者たちをエジプトのモーセのたんなる剽窃者としかみなかった」(K. I. S. 24)と注記している。このモーセ云々という叙述は、おそらく、「労働は富の原因であり怠惰は貧困の原因である」という答え(ちなみにそれはアダム・スミスよりずっと以前にソロモン王が認めたところである)……(11)、S. 205、二〇〇頁)というリストの叙述を念頭においたもので、記憶にたよったため、ソロモンと書くべきところをモーセと書いてしまったのだと思われる。

(7) この叙述は、旧メガの編集者によって「私的所有と労働」という題を付された断片に含まれているが、この断片はもともと端初的な形態における『剰余価値学説史』だといえる。また、この学史把握はマカロック[9]の影響を強くうけており、その影響は『序説』にまで及んでいるといえる。これらの点については別の機会に詳しく論じる。

(8) より詳しくみれば、デステュットとリカードの見解は同じではない。この点については、さしあたり『資本論』第一巻第一章の注三一(K. I. S. 94—95)をみよ。

(9) 「古典派の把握を本質的には超克しえていない」というのは、あくまでも労働の二重性の区別に関してである。その他の点では、マルクスは古典派を乗り越えた面をもつのであり、それは別稿で解明する。

四 従来の研究について

さらに、従来の研究では『序説』における労働の二重性把握がいかにとらえられてきたかをふり返って検討し、本稿が従来の研究史のなかでいかなる位置を占めるものであるかを明確化しておくことにしよう。

すでに述べたように、『序説』の労働一般に関する通説的解釈は、それを価値形成労働一般さらには『資本論』の価値実体・抽象的人間労働と解するものであった。そして、このような解釈にもとづいて、『序説』の労働一般に関する規定は、しばしば『資本論』解釈に援用されてきた。だが、このような解釈や研究姿勢は、『序説』において労働の二重性が区別されていたということを暗黙のうちに前提しているのである。なぜなら、もし『序説』で労働の二重性が意識的に区別されていなかったとすれば、『序説』の労働一般が『資本論』の価値実体等と等置しえず、『序説』の規定を『資本論』解釈に安易に援用しえないことは明らかであるから。したがって、従来の研究では、たとえ明示的に述べられていないにせよ、『序説』で労働の二重性が意識的に区別されている

ということが暗黙のうちに仮定されているのであり、このような研究の現状は克服されなければならない。

従来の研究ではまた、労働の二重性が発見されたのは『要綱』でのことであるという説が広くうけ入れられつつある。たとえば、トゥーフシェーラーによれば、マルクスは『経済学批判』ではじめて商品と商品を生産する労働の『二重性』について述べているとはいえず、かれは事実上すでにここで『要綱』で——引用者」商品と商品に含まれる労働の二重性を発見している」〔12〕、S. 389〕。このような解釈は広くうけ入れられてきており、新メガの『一八五七—五八年の経済学草稿』の「序文」でも、『要綱』のなかではじめてつくりだされた労働の二重性に関する命題……」(MEGA, II-1.1, S. 15*)と述べられている。この判断はほぼ正しいのであるが、もし労働の二重性が『要綱』で発見されたのであれば、『序説』において労働の二重性がどう認識されていたかについて結論が出されるべきである。『序説』が『要綱』にさきだって書かれ、『要綱』で労働の二重性が発見されたのだとすれば、当然『序説』では労働の二重性が意識的に区別されていなかったことになろう。しかるに従来の研

究のほとんどは、『序説』における労働の二重性把握の限界を明確化するに至っていない。その点については、一般に言及が避けられている。

もちろん、従来の研究においても、たとえばエチエベリアのように、『序説』段階の「マルクスの分析は、後年のマルクスの具体的労働と抽象的労働との厳密なる區別を欠いている」⁽¹³⁾ (p. 343) という結論にまで到達した論者は存在する。しかし、彼のばあい、このような結論的な命題が断定的に述べられているだけであり、具体的に論証されているわけではない。そして、私の知るかぎりでは、『序説』において労働の二重性が意識的に区別されていないということを確認、その論証に成功した者はいないのである。

もし、『序説』ではいまだ意識的には労働の二重性が区別されていないということが論証されるならば、『序説』が経済学者として成熟したマルクスの著作とは言えないことが明らかとなり、従来の研究に多くの反省が求められることになるであろう。⁽¹⁰⁾それがゆえに私は、このような理論研究との連関を念頭におきつつ、本稿においてその論証を試み、研究の新たな進展をもたらすための

一つの基礎を築こうとしたのである。

(10) ここで詳しく論ずることはできないが、『序説』は過去の理論研究に多大な影響を及ぼしてきた。その影響は、とりわけ価値論および方法論の領域にみられる。従来、『序説』に依拠することによってさまざまなことがいわれたのであるが、本稿の結論は、『序説』への依拠の仕方そのものから反省すべきであることを示唆するものである。

まとめに代えて

以上をもって、最初に提起した仮説の論証を終える。本稿の考察については、今後、批判を待って再考するとともに、必要な補足をおこないたいと思う。

《参考文献》

- [1] W. Petty.: *A Treatise of Taxes & Contributions, in The Economic Writings of Sir William Petty*, ed. by C. H. Hull, vol. I, 1899. (大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』岩波文庫)
- [2] A. Smith.: *The Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan, vol. I, II, 3rd. ed., 1922. (大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』(一)～(五) 岩波文庫)
- [3] J. M. Lauderdale.: *An Inquiry into The Nature and Origin of Public Wealth*, 1804.

- [4] Destutt de Tracy.: *Elements d'Idéologie, IV^e et V^e parties*. 1815
- [5] D. Ricardo.: *On The Principles of Political Economy and Taxation*, ed. by P. Straffa. 1951. (堀経夫訳『経済学及び課税の原理』雄松堂書店'一九七二年)
- [6] T. R. Malthus: *Principles of Political Economy*, 1 st. ed., 1820. (小林時三郎訳『経済学原理』上・下、岩波文庫)
- [7] T. R. Malthus.: *Definitions on Political Economy*, 1827. (玉野井芳郎訳『経済学における諸定義』岩波文庫)
- [8] R. Torrens.: *An Essay on The Production of Wealth*, 1821.
- [9] J. R. McCulloch.: *A Discourse on The rise, Progress, Peculiar Objects, and Importance of Political Economy*, 1824.
- [10] J. R. McCulloch.: *The Principles of Political Economy*, 1 st. ed., 1825.
- [11] F. List.: *Das nationale System der politischen Ökonomie*, 1841. (小林昇訳『経済学の国民的体系』岩波書店'一九七〇年)
- [12] W. Tuschscheerer.: *Beyor „Das Kapital“ entstand*, 1968.
- [13] R. Echeverria.: "Critique of Marx's 1857 Introduction", *Economy and society*, vol. 4, Nov. 1978.
- [14] 河上肇『資本論入門』(『青木文庫』)
- [15] 内田義彦『増補・経済学の生誕』未来社、一九六二年。
- [16] 見田石介『資本論の方法』『見田石介著作集』第四巻、一九七七年、所収。
- [17] 時永淑『改訂増補版・経済学史』法政大学出版局、一九七一年。
- [18] 遊部久蔵『商品論の構造』青木書店、一九七三年。
- [19] 平田清明『経済学批判への方法叙説』岩波書店、一九八二年。

(一橋大学助手)